

【令和3年度 優秀卒業論文】

過疎地域の小規模校における現代的課題と解決の方策

水谷 響

序章 研究の動機と目的・方法

第一節 研究の動機

私が本テーマを研究しようと考えた理由は、私自身が小規模校で小・中学校時代を過ごしたことにある。私は紀北町の小学校で4年生と5年生の複式学級を経験した。当時の担任教師は一人でこの学級を担当し、前の黒板で5年生を教え、後ろのホワイトボードで4年生を教えるといった風に、授業中も教室の前後を行ったり来たりしていたことが印象深い。また、その都合上、各学年が授業中に教師の話を受ける時間は半分（約20分）となるため、グループ学習や自主学習が中心となる。担任教師も複式学級を受け持つのは初めてだったようで、大変なことも多いと保護者に話っていたようだ。

以上の私の経験から、小規模校は通常規模の学校と比べて授業方法や仕組みの面で大きな違いがあることがわかった。私が教員として小規模校の担任をすることになった時は、小規模校のメリットをいかしつつ、ここでしかできないような初等教育を実践していきたい。また、現在は私の小学校時代に比べて、過疎地域の課題解決が全国的に推進されるようになり、文部科学省による教育方針も大きく変わっていることだろう。私が小学生の時はわかっていなかった小規模校の様々な現代的課題や解決の方策について、改めて教師の目線から考えたいと思い、本テーマを設定した。

第二節 研究の目的・方法

本研究の目的は、過疎地域の小規模校に置かれた現代的課題を把握し、

その解決策を提案することである。そのために、まずは全国と三重県の小規模校の現状を把握し、小規模校におけるメリットとデメリットを様々な視点から考察する。次に、小規模校の課題点や授業方法についての調査を行い、調べたことをもとに課題解決やより良い学校教育に向けた方策を検討していく。また、今回は小規模校の中でも特に複式学級に焦点を当て、複式学級ならではの授業方法や教育上のメリットをいかしつつ、実践的に取り入れることが可能な方策を提案したい。

対象校種は小学校とし、その中でも特に複式学級を含む小学校に焦点をあてて研究を行う。

第一章 小規模校について

第一節 学校規模の定義

文部科学省の省令である学校教育法施行規則によると、小学校の適正規模について次のように定められている。

（学校教育法施行規則）

第41条 小学校の学級数は、十二学級以上十八学級以下を標準とする。ただし、地域の実態その他により特別の事情のあるときは、この限りでない。

学校教育法施行規則第41条によると、小学校の学級数は、「十二学級以上十八学級以下を標準とする。」と位置づけている。しかし、同時に「地域の実態その他により特別の事情のあるときは、その限りではない。」とも定めており、全国一律の明確な適正規模は定められていないことになる。そのため、各地域で様々な事情を考慮すれば、必ずしも定められた標準規模に合わせる必要はなく、各地域の弾力的な対応に任せられているといえる。

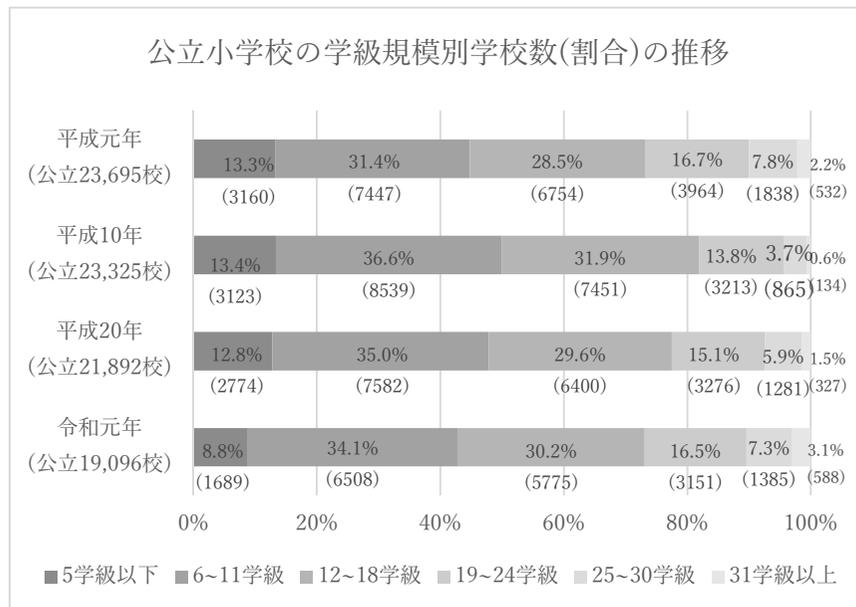
以上より、学校規模の定義は明確に定められていないが、便宜上、省令で定められている標準規模（総クラス数 12-18 学級）を上回る学校を「大規模校」、下回る学校を「小規模校」と呼ぶことが多い。

また、小規模校の中でも総クラス数が5学級を下回る学校は「複式学級校」と呼ばれる。複式学級とは、国の定める学級編制基準に照らして、児童又は生徒数が少ないために一つの学年の児童又は生徒だけでは学級の編制ができない場合に、同一学級に2個学年を収容して編制する学級である。これに対して、同一学年が一学級で編成された学級を単式学級という。

第二節 学校規模の推移

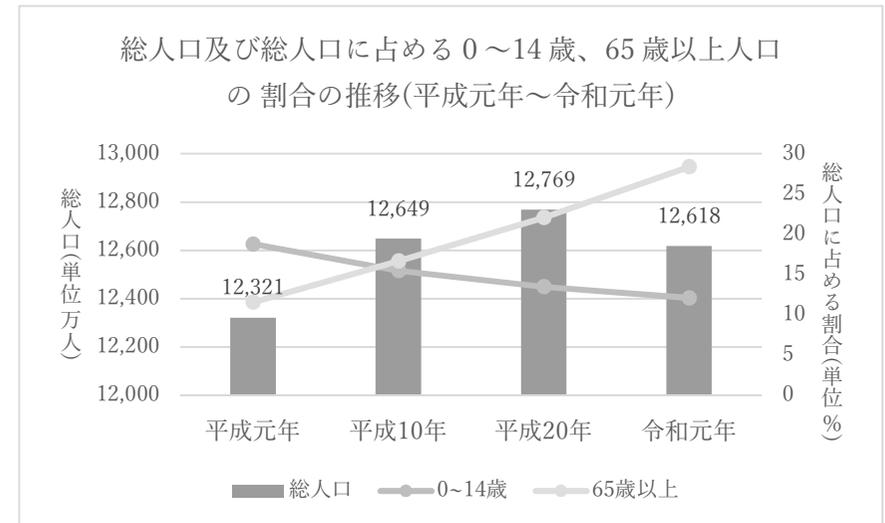
文部科学省の学校基本調査によると学級規模の推移は次のようになっている。

（表1）



グラフの校数に着目すると、平成10年～令和元年にかけて公立小学校の数が大きく減少していることがわかる。私は、学校数の減少の理由が、少子化による人口減少にあると予想した。そこで、総務省統計局の人口推計を用いて平成元年～令和元年の総人口及び総人口に占める年齢別の割合の推移を次のように整理した。

（表2）



グラフから、平成元年～平成20年にかけては総人口が増加、その後は減少していることが読み取れる。日本の総人口のピークは平成20年とされており、本格的な人口減少社会は平成23年から現在まで続いている。しかし、先ほどの学級規模別学校数の推移(表1)と比較すると、平成10年～平成20年にかけて総人口は増加しているのに対し、学校数は減少していることがわかる。この点から、総人口と学校数の相関関係は見られないといえる。

続いて、総人口に占める0～14歳の人口割合の推移と学級規模別学校数の推移(表1)の変化に着目すると、どちらも例年少しずつ減少傾向に

あることがわかる。この点から見ても、過去20年の学校数の大幅な減少は少子化の影響が大きいといえるだろう。加えて、65歳以上の人口割合は例年増加傾向にあることから、日本の少子高齢化社会が本格的に進んでいることが読み取れる。

また、表1の学級規模別学校数の割合に着目すると、小規模校は低下、標準規模校は横ばい、大規模校は上昇の傾向にあることがわかる。このように変化した理由は、平成11年～平成20年にかけて行われた「平成の大合併」による影響が大きい。一市町村の役割の強化を目的とし、全国規模で市町村合併が行われたため、市町村の数は3,229から1,727にまで減少した。これに伴い、多くの学校でも統廃合が行われた。統廃合される学校は、既に児童数の少ない小規模校の場合がほとんどであるため、小規模校の割合が低下したと考えられる。

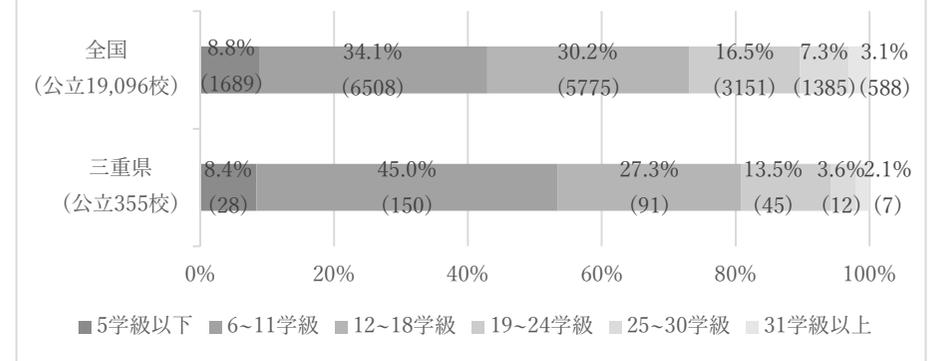
学校の統廃合は「平成の大合併」収束後も続き、現在も学校数は減少し続けている。このようにして、学校の統廃合を推進することで学校規模の適正化を図ってきたが、現在でも小規模校の割合は全体の約4割であり、依然として高いことが現状である。文部科学省は、小規模校が現在も多い理由について、財政上の理由や、学校がなくなることで近隣から子育て世代が減り、地域の衰退につながる可能性があるからと考えており、学校の統廃合について批判的な地域住民も多い。

第三節 小規模校の現状と課題

(1) 小規模校の現状

続いて、三重県教育委員会「学校名簿令和3年度版」のデータを基に、全国と三重県の小学校規模別の比較を行った。結果は次の通りである。

全国と三重県の公立小学校規模別の比較（令和元年）



グラフから、全国の公立小学校の内、総クラス数11学級以下の小規模校（5学級以下と6～11学級以下の合計）は42.9%となっているのに対し、三重県は53.4%と約10%高いことが読み取れる。ここから、三重県は現在も半数以上の学校が小規模校であることが現状だといえる。特に、三重県の南部地域は学校の小規模化が進行しており、三重県の南部地域の4市町（紀北町、尾鷲市、熊野市、御浜町）にある小学校25校のうち24校が小規模校である。また、小規模校のうち半数の12校が複式学級校となっている。

※三重県南部の4市町における規模別小学校数（三重県、2021）

	本校	小規模校	
			複式学級校
紀北町	8	8	4
尾鷲市	5	4	2
熊野市	8	8	4
御浜町	4	4	2
計	25	24	12

（2）小規模校の課題

文部科学省は「小規模校の学校において、教育条件の向上を図る観点から、特に克服が求められる課題は何か。」という質疑に対し、以下のように答えている。

- ① | 学年 | 学級が常態化するため、クラス替えができず人間関係が固定化しやすい
- ② | 教員数が限られるため、習熟度別指導、教科担任制等多様な指導方法をとることが困難になる
- ③ | 行事の幅が狭くなる
- ④ | 授業の中で児童から多様な発言が引き出しにくく、授業の組み立てが難しくなる
- ⑤ | 男女の偏りが生じやすい
- ⑥ | 学年 | 学級を維持できず、複式学級となる場合のデメリットは大きい

挙げられた6つの課題は、すべて小規模校における特有の課題であるといえる。児童数が少ないことが主な要因となっているが、②のように教員数が少ないことによる指導方法の影響も小規模校の運営上の課題となる。

また、上記⑥の記述から、複式学級は①-⑤までに挙げられた課題が単式学級以上に顕著に現れていると考えられる。第3節でも述べたように、三重県は南部地域で複式学級校の割合が高く、地理的影響で学校の統廃合が難しい地域も多いため、複式学級におけるこれらの課題は早急に解決される必要があるといえる。そのため、次章からは複式学級に焦点をあてた課題解決の方策について論じていく。

第二章 複式学級について

第一節 複式学級の特性

複式学級を有する学校について、文部科学省は「学校統合などにより適正規模に近づけることの適否を速やかに検討する必要があり、地理的条件により統合困難な事情がある場合は、小規模校のメリットを最大限生かす方策や、小規模校のデメリットの解決策や緩和策を積極的に検討・実施する必要がある。」と言及している。そのため、小規模校及び複式学級は無くしていくという考えではなく、その在り方を改めて考えていく必要があるのではないかと。複式学級の在り方を考えるにあたって、まずは複式学級を運営する上での長所・短所を整理する。

複式学級の特性（北海道教育委員会、2013）

長所と思われること	短所と思われること
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学級の児童生徒が異学年で構成され、互いに親密な関係を持ちやすい。 ・ リーダーとフォロワー（協力者）という二つの立場を経験することができる。 ・ 少人数で児童一人一人に応じた指導がしやすい。 ・ 学年別の指導の場合、児童生徒は教師のつかない時間を使って習熟を図ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学年や性別による児童生徒数に偏りがあり、交流の相手が限定されるため、学習場面で多面的に考えながら討議を展開することなどが難しい。 ・ 大きな集団での社会的経験の場や機会が不足しがちになる。 ・ 児童生徒の年齢や学年が異なるため、個々の能力の差、個人差が大きい。

複式学級は単学年で指導する場合と指導方法が大きく異なるため、その相違点を短所と捉えてしまいやすい。しかし、複式学級における短所は長所にも成り得るのではないかと。例えば、「児童生徒の年齢や学年が異なるため、交流が限定されやすい。」という短所は「学級の児童生徒が異学年で構成され、互いに親密な関係を持ちやすい。」という長所として考える

ことができる。この考えに関して、玉井（2011）は「小規模校をマイナス面で捉えるのではなく、それをメリットとして捉えるパラダイムの転換と、さらに新しい活動を行う条件づくりと施策を創りだしていくという意識転換を図っていく必要がある。」と述べている。複式学級のメリットを最大限にいかし、デメリットを最小限に且つメリットに変えられるような施策を取り入れていくとともに、教師自身が複式学級のデメリット部分を悲観して捉えないように意識転換していく必要があるといえる。

また、真木（2015）は「わが国では、同年齢集団によって学級が構成されていることが当然のように受け止められているが、家族も会社等の企業体も大半が異年齢集団からなっており、学校以外に同年齢集団で構成される組織体は殆ど見ない。学級構成が年齢化されたのは、教育の効率性を求めた結果であり、非効率的といえる複式学級が回避される所以である」としており、これまでの学習指導要領に見られる大量生産型の教育による考え方に対して異を唱えている。

私も、玉井と真木の考えに同意する。日本は学級編制の仕組みにおいて、一人の教師が多数の児童に向けて授業を行うという形態が常態化していた。しかし、その形態が昨今見直されてきているように感じる。2021年3月31日には文部科学省による「公立義務教育諸学校の学級編成及び教職員定数の標準に関する法律の一部を改正する法律案」が国会で可決、成立した。本法律は、小学校の学級編制の標準を5年間かけて計画的に40人から35人に引き下げるもので、少人数学級の実現は教育現場からの長きにわたる強い要望の一つだった。今回、こうした学校の少人数学級化が実現した背景としては、Society5.0時代の到来や子ども達の多様化の一層の進展、今般の新型コロナウイルスの発生などの影響が大きく関わっており、個別最適な学びと協働的な学びを効果的に推進していくためのより良い環境づくりとして期待されていると考えられる。

以上より、これからの日本教育はこれまでの詰め込み教育や大量生産型の考え方から脱却し、子ども一人一人に寄りそったパーソナライズな教育に転換していくことが求められる。このことを踏まえると、現在の小規模校や複式学級は現代の教育の在るべき姿といえるのではないか。そこで、

第二節では複式学級の授業形態を調査し、少人数学級における授業形態の特徴やその教育的効果について考察する。

第二節 複式学級の授業形態

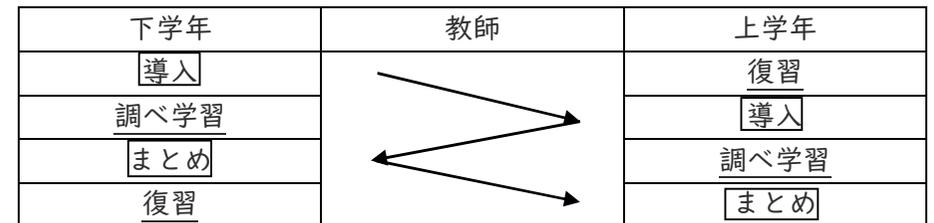
第一節でも述べたように、複式学級は通常の学級における授業形態とは大きく異なる。特に、代表的な指導方法として「学年別指導」と「同単元指導」の二つが挙げられる。この二つの指導方法の仕組みは以下の通りである。

（1）学年別指導

学年別指導は、学年ごとに学習指導を行う形態である。例えば二つの学年を同じ時間に国語科と算数科を組み合わせたり、国語科の違う単元を組み合わせたりして指導することができる。学年別指導を行う際は、「わたり・ずらし」と呼ばれる指導方法が用いられる。

「わたり」は教師が学年をわたって授業を行い、他学年の授業を並行して行うことである。「ずらし」は「わたり」を効率よく行うため、授業段階（導入・展開・まとめ）に復習や調べ活動などの間接指導を入れ、授業段階をずらして行う授業方法である。以下は、へき地教育ホームページで示されているわたり・ずらしの仕組みの図である。

わたり・ずらしの仕組み(へき地教育ホームページ)



教師の移動：

教師の授業場所：

児童・生徒の自主学习：

学年別指導の形態をとることで、1時間の授業内で同時に2学年分の授業を終えることができる点はメリットである。教師が各学年に付き添うことのできる時間は必然的に半分になってしまうが、教師がついていない方の学年に対して「ずらし」における間接指導を効果的に取り入れることで改善できる。また、この間接指導中はグループ活動を行ったり、自主学习をしたりといった児童主体での活動が多くなるため、子どもの主体性を身に付ける良い機会になる。しかし、学年別指導は教師への負担が大きいという課題がある。複数の教材研究を並行して行う必要がある点や授業の進度によっては片方の学年にかかる時間が増え、指導の偏りが大きくなってしまいう可能性も考慮しなければならない。

（2）同単元指導

同単元指導とは、同一時間に2つの異なる学年が1つの教室で同じ単元の同じ内容を学習し、単元学級とほぼ同じ学習形態で授業を行うことができるように工夫された指導形態のことを指す。さらに、同単元指導は大きく分けて一本案、二本案に分類される。

一本案は一年分の年間指導計画を1年次と2年次の2年間を使って繰り返して指導する方法で「繰り返し案」とも呼ばれる。両学年とも同じ教材を使って指導するが、学年相応の発達差と学習経験の差を考慮する必要があるため、実現すべき目標と内容の程度を学年別に変えて指導計画を編成しなければならない。また、両学年の内容を一年間で学習できるように教材を精選して単元を構成し、これを二年間繰り返して指導する方法は「完全一本案」と呼ばれ区別されている。両学年とも同じ目標・内容で進めていくため、比較的学年差が重視されにくい体育科や図画工作科に多い指導方法である。

二本案は上下両学年の教材を1年次（A年度）2年次（B年度）の2本の年間指導計画に配分し、2年間で両学年の学習内容を完結する指導方法である。そのため、この指導計画は「AB年度案」と呼ばれる。どの学年においても両学年に同じ内容を同じ目標で、同じ方法で指導するため、一本

案以上に学年相応の発達差と学習経験の差を考慮する必要がある。以下は、へき地教育ホームページで示しているAB年度案の例である。

AB年度案：5、6年生「社会科」（へき地教育ホームページ）

単式学級での場合		複式学級における AB年度案を用いた場合	
A年度		A年度	
5年生	地理	5年生	歴史
6年生	歴史	6年生	
B年度		B年度	
5年生	地理	5年生	地理
6年生	歴史	6年生	

学年別指導と異なり、同じ内容の授業で異なる2学年を同時に教えられることが同単元指導のメリットといえる。また、異学年交流が行いやすくグループ活動等で協力的な学習の場を設定することができる。同単元指導の課題としては学年差がある以上、下の学年が学習内容を正しく理解することが難しい場合がある点や、各教科の系統性・順次性に配慮する必要がある点等があげられる。

学年別指導と同単元指導はそれぞれにメリットとデメリットがあるため、実際の複式学級の授業では、教科ごとの特性や内容に応じて指導形態の使い分けがされている。深見(2018)は次のように述べている。

教師の指導のしやすさを考えると、学年別の順序によらない仕方で学習する同単元指導のほうが指導しやすい。北海道では、国語・算数・理科・社会は、ほとんどの学校が学年別指導で授業を行っている。同単元指導で同内容同程度の指導をすると、例えば、3年生が同単元指導で4年生の理科の授業を行う場合、3年生の内容を学んでいないの

に4年生の内容を学習することになり、学習の系統性や学習内容の難易度から、学習内容を正しく理解することが難しい状況が生じると考えられる。

このことから、教師目線で見ると同単元指導を採用した方が授業自体は行いやすいと考えられる。しかし、同単元指導を行うには2学年を対象とした年間指導計画の作成が必要となる。また、深見が述べているように国語・算数・理科・社会のような教科は学年差がはっきりしやすいため学年別指導が採用される傾向にある。対して、音楽・体育・図工のような教科は学年差がでにくいことが多いため同単元指導が採用されることが多い。いずれの場合においても、各教科の指導形態の特性を理解した上で、ケースバイケースで対応することが重要である。

第三章 課題解決の方策について

第一節 複式学級の教育実践

複式学級において、国語・算数・理科・社会といった教科は学年別指導が採用される傾向にあることがわかった。一方で、これらの教科を同単元指導で行うことを試みている教育実践もある。

（1）東紀州サテライト（外国語）

三重県南部地域では、三重大学東紀州サテライト東紀州教育学舎によって各学校に対する教育支援が行われている。外国語教育やICTの教育利用など新しい時代の教育活動の支援を中心に活動している。大野ら(2020)の研究では複式学級における外国語の指導方法として「圧縮版年間指導計画」を作成し授業実践をしている。これは、2学年分の学習指導要領に示された内容を圧縮して1年間で学習できるよう単元を構成し、2年間繰り返し指導する「繰り返し案」を使った指導方法である。ICTを活用したり話すときに用いる語彙を優先して学習したりといった工夫を組み込むこ

とで、繰り返し案におけるデメリットである時間的余裕のなさが改善されている。

（2）愛媛県教育委員会「複式学級学習指導資料」（国語）

愛媛県で行われた第5・6学年の複式学級による国語科・書写の教育実践である。この授業では異学年交流の場が多く設定されている。授業内では異学年で話し合いを深めるために、それぞれの学年の毛筆の作品を見合う、活動中の動画を撮影してそれを見合うといった工夫が取り入れられている。こうした異学年交流のメリットについて、下学年と上学年の両方の立場から次のような点があげられる。

異学年交流のメリット

下学年にとって	上学年にとって
<ul style="list-style-type: none"> ・自分では気付かなかったことを上級生に教えてもらえる。 ・上級生のおかげで新しい内容の導入がスムーズにできる。 ・次年度学習する内容の予習ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前年度までの復習ができる。 ・上級生としての確かなアドバイスができるよう、真剣に聞くことができる。

異学年交流には多くのメリットがあり、複式学級で生かしやすい活動の工夫であるため、授業内で積極的に異学年交流の時間を取り入れるようにすべきだと考える。

（3）Education Information of Shimane「複式学級指導の手引き」

島根県は全体的に過疎化が進んでおり複式学級の学校も多い。そのため、「複式学級指導の手引き」として複式学級の指導方法のポイントや例が詳しく説明されている。国語、社会、理科、算数の指導のポイントは次の通りである。

○国語

同単元異内容においては、同領域の関連のある教材を組み合わせて一つの単元を構成する。両学年に共通の目標と、学年別の目標とを設定する。課題をつかむ場面や終末部分等を一緒に行ったり、同様の言語活動を行ったり、共通のワークシートを利用したりすることも考えられる。上学年が下学年の学習を振り返ったり、下学年が上学年の学習を参考にしたりする良さもある。

○社会

同単元同内容同程度で指導計画を立てる場合は、学級にまとまった学習の雰囲気を得られ、活動も活発となる利点があるが、児童の経験や社会的事象について考える力等についていかに調整を図るかが課題としてあげられる。教科書資料の使用等、学年差に応じて十分に配慮されなければ効率のあがる学習にはなり得ない。

○理科

同単元同内容同程度（A・B年度方式、2本案）においては、理科は、観察や実験が学習活動の中心となることから、集中的に教材の研究をすることができ準備も容易になる。また、両学年の児童が互いに協力して、考えを深められるという良さがある。一方、他教科と同様に、学年差、個人差の大きい学習集団であるという実態を十分認識して、能力差に着目した授業展開をしなければならない。

○算数

算数科では、異単元（学年別指導）により指導計画を立てるのが一般的である。算数科の場合、系統性が重視されるため、同単元同内容同程度（A・B年度方式、2本案）や、同単元異内容（1本案、くりかえし案）で年間指導計画を作成することは難しくなる。しかし、部分的に両学年の内容が共通する単元において、同単元異内容（1本案、くりかえし案）の指導計画を取り入れていくことは可能である。

同単元指導をする際は、どの教科においても学年差、個人差が大きくな

らないように留意しなければならないと説明されている。ただし、算数のみ系統性が重視される教科であることから、同単元指導の方法は記述されていなかった。しかし、学年別指導を主としつつ、部分的に両学年の内容が共通する単元において、同単元異内容の指導計画を取り入れていくことは可能であると述べられている。

第二節 複式学級の国語科における指導方法の方策

これまで考察した複式学級における現状と課題について整理する。まず、学校の少人数学級化は長きにわたり教育現場で求められていたことで、それが最近になって実現されようとしている。その上で小規模校及び複式学級は現代の学校の在り方と一致していると考察した。しかし、複式学級は小規模校以上に児童や教師の少なさによる影響が大きく、授業の進行やあらゆる活動上の不便も多いという課題がある。そこで、複式学級の授業形態に着目し、実際に行われている教育実践を調査した。以上の点を踏まえて、授業実践の内容や工夫を参考にしつつ課題解決の方策を考案したい。

私が考案したいのは、複式学級の国語科における学年別指導と同単元指導を組み合わせた年間指導計画の作成である。科目の中で、国語科を選択した理由は二つある。一つ目は、私が教育学部の国語教育コースに所属しているため、他教科に比べ国語科についての知識が多く、論理的な考察がしやすいと考えたためである。二つ目は、実際の教育現場では国語科は学年別指導で行われることが多く、同単元指導を実践している例が少ないためである。国語科を学年別指導で教えることが多い理由について、光村図書サイトの「複式学級指導 Q&A」では「学年別の教科書や単元別テストが多いから」と説明している。確かに、学年別で授業をすることを想定している教材を使っている以上、同単元指導を行うことの教師側の負担は大きい。しかし、私は国語科における同単元指導の良さについて以下のように考えている。

①国語科指導要領に2学年ごとに目標、内容が示されている趣旨を生かす

ことができる。

- ②異学年交流を通して互いの立場や考えを尊重しながら言葉で「伝えあう力」を高めることができる。
- ③両学年の児童に直接指導ができるため、その後の課題点の改善や評価が行いやすい。

①について、平成10年度に改訂された小学校学習指導要領では国語科における各学年の目標及び内容が2学年ごとのまとまりで示されるようになった。この改訂により同単元指導に必要な年間指導計画（AB年度案）の作成が行いやすくなったと考えられる。理由は、同単元指導に用いられる年間指導計画は2年間かけて定められた目標に到達できるように作成する必要があるためである。そのため、学習指導要領を参照することで、より質の高い年間指導計画の作成ができるようになると考えられる。

②について、新学習指導要領には「国語科の最も基本的な目標である国語による表現力と理解力とを育成するとともに、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し互いの立場や考えを尊重しながら言葉で「伝え合う力」を高めることを位置付けている。」と記述されている。この「伝えあう力」を高めることについて、異学年交流を行うことが非常に効果的だと考える。異学年でのグループ活動や発表を通して、上学年が下学年に学びを教えたり、それによって下学年の学びが広がったりといった効果が期待される。

③について、学年別指導で行う際に、授業の半分が間接指導となってしまうことのデメリットをなくすことができると考える。間接指導は、子ども自ら学習を進めていくことができるような手だてを取るとともに、他学年の学習に気をとられないような集中力と持続力の育成が十分にされていなければならない。同単元指導を取り入れれば、両学年の児童に直接指導ができる時間が増えるため、授業の展開もスムーズになるだろう。加えて、児童と教師の関わりが増えることは、児童の発言を聞いたり様子を観察する時間が増えたりすることにつながる。そのため、授業後の課題点の改善や評価が行いやすくなり、より良い授業づくりができるようになる

考える。

以上の3点が私の考える国語科における同単元指導の良さである。しかし、これらのメリットがありながらも複式学級の国語科で同単元指導が取り入れられづらいのは、年間指導計画の作成の難しさにあると考える。光村図書サイト「年間指導計画および評価の計画作成に当たって」では指導計画を作成する際の観点として以下の6点をあげている。

- ①単元の配列を考慮し、4月から学習した経験をいかして
- ②前の学年の学習経験や身につけた力を考慮して
- ③学校独自の「総合的な学習の時間」との連携を図って
- ④教材の話題・題材・活動内容から他教科との関連を図って
- ⑤学校行事や地域の行事との関連を図って
- ⑥年間を見通した「帯化」した扱いで

年間指導計画は上記の観点を考慮しながら作成する必要があるため、同単元指導の一本で進めていくことは非常に難しいことがわかる。そのため、年間指導計画を作成する際は、同単元指導を基本としながら、同単元指導が難しいと思われる単元は学年別指導を取り入れるといった折衷案を用いて指導していくことが効果的であると考えた。この指導方法を取り入れた年間指導計画を作成するにあたって、鹿児島県総合教育センターの指導資料「複式学級における同単元同内容指導」では次のような観点を述べている。

- ①指導内容の系統性の観点から、「話すこと・聞くこと」の教材、「読むこと」の文学的文章教材は、同単元同内容指導とし、説明的文章教材など、それら以外の教材は学年別教材とすることが一般的である。
- ②同一年度に、一方の学年の教材が偏らないようにするなどして、取り上げた単元をA・B両年度にほぼ均等に振り分ける。
- ③位置付けた単元が異学年で同じ時数になるように調整する。時数の

調整は、「話すこと・聞くこと」や「読むこと」などの各領域内で行う。

- ④基礎・基本の確実な定着のために、指導内容の精選・重点化を図り、共通の指導目標と個人差に応じた目標を設定する。

上記の5点は、同単元指導の年間指導計画を作成するにあたって重要な観点となるので作成の参考にしたい。

第三節 年間指導計画（国語科AB年度案）の提案

提案する年間指導計画は三重県の南部地域の複式学級校を対象とする。三重県教育委員会ホームページの採択地区別教科書状況一覧によると、三重県南部地域で使われている小学校用国語教科書は光村図書であることがわかる（令和3年度現在）。そのため、今回作成する年間指導計画は光村図書の国語教科書とその年間指導計画案を参考にする。また、対象学年は5、6年生の複式学級とした。理由は、総授業時数が両学年とも145時間（書写を含めると175時間）と同じであることと、学年差を考慮した時にある程度漢字や文法に対する理解が深まっている高学年の方が効果的な指導ができると考えたためである。よって、光村図書小学校国語教科書『国語五 銀河』『国語六 想像』を合わせたの年間指導計画を作成することとする。

また、同単元指導の指導計画は大きく分けて一本案、二本案に分類されるが、今回は二本案を想定して作成する。二本案は2学年分の教材をA年度、B年度の二つに配分することができ、国語科の2学年ごとに目標、内容が示されている趣旨を生かすことができるためである。

第二節で述べた鹿児島県総合教育センターの指導資料「複式学級における同単元同内容指導」の内容を踏まえつつ、年間指導計画の観点や留意点を大きく分けて4つに設定した。次の通りである。

- ①基本的には、「話すこと・聞くこと」の教材、「読むこと」の文学的文章教材は、同単元指導とする。また「書くこと」の教材、「読むこと」

の説明的文章教材は、学年別指導とする。単元の内容や児童の能力差に応じてこれらの指導方法は弾力的に変えることができる。

- ②同一年度に、一方の学年の教材が偏らないようにするなどして、取り上げた単元をA・B両年度にほぼ均等に振り分ける。
③両学年で同じ領域を満たす単元を指導する場合、片方の学年の教材のみ取り上げ、同単元指導をすることもできる。
④位置付けた単元が異学年で同じ時数になるように調整する。時数の調整は、「話すこと・聞くこと」や「読むこと」などの各領域内で行う。

①について、「漢字の広場」「漢字の成り立ち」といった各学年で学習する漢字や熟語を扱う単元は、学年差を考慮して学年別指導で行う必要があると考える。ただし同単元指導では、下の学年が上の学年の教材を学ぶ場合もあり、まだ学習していない漢字が本文中に登場することも考えられる。その際は、逐一漢字の読みや意味を確認しながら進めていきたい。また、説明的文章教材は「書くこと」や「知識・技能」の領域が学年差を生みやすく、系統性が重視されている内容が多いことが考えられるため、学年別指導で行う方が効果的であると考え。その他の「話すこと・聞くこと」「読むこと」の領域や文学的文章教材については学年差が大きくなりやすく、下の学年が上の学年の教材を学ぶことも可能だと考えたため同単元指導で進めていきたい。

②について、同単元指導で進めていく単元（話すこと・聞くこと・文学的文章教材）はA・B年度それぞれに均一になるように振り分ける必要がある。一方の学年の単元ばかりを連続して学習することが、できる限り少なくなるように順序等調整する。また、5年生の教科書では、通常の間指導計画案だと6月に「古典の世界(一)」、11月に「古典の世界(二)」を学習するようになっているが、両方の年度案で古典に触れることができるように、A年度案に「古典の世界(一)」、B年度に「古典の世界(二)」をそれぞれ振り分け、どちらも同時期に学習するように調整をする。

③について、例えば5年生「教えて、あなたのこと」と6年生「つないで、つないで、一つのお話」はそれぞれの学年で一番初めに学習する単元

であるが、複式学級での同単元指導を踏まえると「教えて、あなたのこと」は自己紹介活動を取り入れることができるため、異学年交流の観点から効果的な単元であるといえる。そのため、本指導計画では5年生「教えて、あなたのこと」を採用し、A・B両年度で取り入れるべきだと考えた。このようにA・B両年度で取り入れている単元については本指導計画で◎を用いて表している。

④について、A年度とB年度の両方で合計時数が同じになるように調整する。時数の調整は、「話すこと・聞くこと」や「読むこと」などの各領域内で行うという観点の、今回は両年度とも合計授業時数が145時間となるように「みんなで楽しく過ごすために」と「今、私は、ぼくは」の授業時数を1時ずつ減らすことにする。

以上の点を踏まえながら、次の国語科年間指導計画を提案する。

国語科年間指導計画 5、6年生（AB年度案）

【A年度案】

月	単元名及び教材名		領域	時
	5年	6年		
4	◎教えて、あなたのこと（5年）		話聞①	1
	かんがえるのって おもしろい/続けてみよう（5年）		読①	1
	帰り道（6年）		読④	4
	◎本は友達－図書館を使いこなそう/地域の施設を活用しよう（5、6年）		知②	2
	漢字の成り立ち	漢字の形と音・意味	知②	2
	春の空（5年）		書②	2
	◎聞いて、考えを深めよう（6年）		話聞⑥	6
5	漢字の広場①	漢字の広場①	書①	1
	見立てる/言葉の意味がわかること/[情報]	笑うから楽しい/時計の時間と心の時間/[情	知①、読⑥	7

	原因と結果	報]主張と事例			
	和語・漢語・外来語	話し言葉と書き言葉	知②	2	
6	日常を十七音で	たのしみは	書③	3	
	古典の世界（一）（5年）		知②	2	
	[情報]目的に応じて引用するとき	[情報]情報と情報をつなげて伝えるとき	書②	2	
7	◎私たちにできること（6年）		書⑨	9	
	同じ読み方の漢字	文の組み立て	知②	2	
	夏の夜（5年）		書②	2	
9	本は友達－私と本/森へ（6年）		読⑤	5	
	せんねん まんねん（6年）		読①	1	
	どちらを選びますか（5年）		話聞②	2	
	利用案内を読もう（6年）		読③	3	
	敬語	熟語の成り立ち	知②	2	
	たずねびと（5年）		読⑥	6	
10	漢字の広場②	漢字の広場②	書①	1	
	漢字の読み方と使い方		言葉の変化	知②	2
	秋の夕暮れ（5年）		書②	2	
	◎みんなで楽しく過ごすために（6年）		話聞⑤	5	
11	漢字の広場③	漢字の広場③	書①	1	
	固有種が教えてくれること/[情報]統計資料の読み方/グラフや表を用いて書こう	『鳥獣戯画』を読むこと/[情報]調べた情報の使い方/日本文化を発信しよう	知①、書⑤、読⑤	11	
	古典芸能の世界－演じて伝える（6年）		知①	1	
	カンジ－博士の暗号解読	カンジ－博士の漢字学習の秘伝	知②	2	
	漢字の広場④		漢字の広場④	書①	1
	狂言 柿山伏/「柿山伏」について（6年）		読④	4	

	◎あなたは、どう考える（5年）	書⑥	6	
	冬の朝（5年）	書②	2	
1	生活の中で詩を楽しもう（5年）	読②	2	
	方言と共通語	仮名の由来	知②	2
	漢字の広場⑤	漢字の広場⑤	書①	1
	想像力のスイッチを入れよう	メディアと人間社会/ 大切な人と深くつなが るために/[資料]プロ グラミングで未来を創 る	読⑥	6
	複合語	漢字を正しく使えるよ うに/覚えておきたい 言葉	知②	2
	言葉について考えよう－伝わる表現を選ぼう（5年）	知①、書②	3	
2	◎思い出を言葉に（6年）	書⑦	7	
	◎今、私は、ぼくは（6年）	話聞⑤	5	
	漢字の広場⑥	漢字の広場⑥	書①	1
	日本語の表記（5年）	知①	1	
3	海の命（6年）	読⑥	6	
	◎卒業するみなさんへ 中学校へつなげよう/ 生きる/今、あなたに考えてほしいこと（6年）	読④	4	

【B年度案】

月	単元名及び教材名		領域	時
	5年	6年		
4	◎教えて、あなたのこと（5年）		話聞①	1
	春の河/小景異情/続けてみよう（6年）		読①	1
	なまえをつけてよ（5年）		読④	4
	◎本は友達－図書館を使いこなそう/地域の施設 を活用しよう（5、6年）		知②	2
	漢字の成り立ち	漢字の形と音・意味	知②	2
	春のいぶき（6年）		書②	2
	◎聞いて、考えを深めよう（6年）		話聞⑥	6
5	漢字の広場①	漢字の広場①	書①	1
	見立てる/言葉の意味 がわかること/[情報] 原因と結果	笑うから楽しい/時計の 時間と心の時間/[情報] 主張と事例	知①、読 ⑥	7
	和語・漢語・外来語	話し言葉と書き言葉	知②	2
	日常を十七音で	たのしみは	書③	3
6	天地の文（6年）		知①	1
	古典の世界（二）（5年）		知①	1
	[情報]目的に応じて引 用するとき	[情報]情報と情報をつ なげて伝えるとき	書②	2
7	◎私たちにできること（6年）		書⑨	9
	同じ読み方の漢字	文の組み立て	知②	2
	夏のさかり（6年）		書②	2
	本は友達－作家で広げるわたしたちの読書/カレ ーライス（5年）		読⑤	5
9	からたちの花（5年）		読①	1
	いちばん大事なものは（6年）		話聞②	2
	新聞を読もう（5年）		読②	2

	敬語	熟語の成り立ち	知②	2
	やまなし/[資料]イーハトーヴの夢（6年）		読⑧	8
	漢字の広場②	漢字の広場②	書①	1
10	漢字の読み方と使い方	言葉の変化	知②	2
	秋探し（6年）		書②	2
	◎みんなで楽しく過ごすために（6年）		話聞⑤	5
	漢字の広場③	漢字の広場③	書①	1
11	固有種が教えてくれること/[情報]統計資料の読み方/グラフや表を用いて書こう	『鳥獣戯画』を読む/[情報]調べた情報の使い方/日本文化を発信しよう	知①、書⑤、読⑤	11
	古典芸能の世界－語りで伝える（5年）		知①	1
	カンジ－博士の暗号解読	カンジ－博士の漢字学習の秘伝	知②	2
	漢字の広場④	漢字の広場④	書①	1
12	やなせたかし－アンパンマンの勇気（5年）		読⑤	5
	◎あなたは、どう考える（5年）		書⑥	6
	冬のおとずれ（6年）		書②	2
1	詩を朗読してしようかいしよう（6年）		読②	2
	方言と共通語	仮名の由来	知①	1
	漢字の広場⑤	漢字の広場⑤	書①	1
	想像力のスイッチを入れよう	メディアと人間社会/大切な人と深くつながるために/[資料]プログラミングで未来を創る	読⑥	6
	複合語	漢字を正しく使えるように/覚えておきたい言葉	知②	2
2	言葉について考えよう－人を引きつける言葉（6		知①、書	3

	年)		②	
	◎思い出を言葉に（6年）		書⑦	7
	◎今、私は、ぼくは（6年）		話聞⑤	5
	漢字の広場⑥	漢字の広場⑥	書①	1
3	大造じいさんとガン（5年）		読⑥	6
	◎卒業するみなさんへ 中学校へつなげよう/生きる/今、あなたに考えてほしいこと（6年）		読④	4

提案した年間指導計画の中で、補足がある単元について説明する。

4月「本は友達－図書館を使いこなそう（5年）」「地域の施設を活用しよう（6年）」はそれぞれの教科書の単元をひとまとまりにしている。本来は5年生で学校の図書館の使い方を学び、6年生で地域の図書館施設の使い方を学ぶといった段階を踏む意図がある構成だと考えられるが、複式学級上では同時に行うことが可能な単元だと考えたためこのような構成に変更した。変更に伴い、本来は1時間の単元を2時間に増やし、7月「私たちにできること」の時数を1時間減らしている。

6月「日常を十七音で（5年）」「たのしみは（6年）」は、5年生は俳句、6年生は短歌を学ぶ単元である。基本的には6年生で学習する短歌の方が、文字数が多く季語が必要といった制約が多くなるため学年別指導で考えている。しかし、児童が作った俳句と和歌をそれぞれ発表し合う活動があれば、俳句と和歌の共通点や相違点を知るきっかけにもなるため、授業の中で両学年の交流活動を積極的に取り入れると良いだろう。

2、3月は5年生と6年生で構成が大きく違うため一部の単元の順序を入れ替えている。6年生は小学校6年間の振り返りとなる単元が中心となっているため、「思い出を、言葉に」「今、私は、ぼくは」「卒業するみなさんへ 中学校へつなげよう/生きる/今、あなたに考えてほしいこと」の3つの単元で6年生の教科書を採用した同単元指導を取り入れたい。この際、5年生は6年生の発表を聞いて自身の思いを伝えるといった活動を行うことで、来年同じ授業を受ける時、次は上の学年の立場から受ける

という意識を感じさせたい。「漢字の広場⑥」は、5年生は3月の最後、6年生は3月の最初で学ぶ単元だったが、同時に学習できるように2月の最後に移動させた。「日本語の表記」は5年生で学ぶ単元だが、6年生ではそれに準ずる単元がなかったため、同単元指導としA年度案に編成した。

終章 研究の成果と今後の課題

第一節 研究の成果

本研究では、過疎地域の小規模校に置かれた現代的課題を把握した上で、その課題を解決するための新たな授業方法の検討を行った。研究を進めることで、小規模校の実態や三重県の小規模校に対する知識や理解が深まり、小規模校の魅力や特性を再認識することができた。本研究でも扱った「わたり・ずらし」や「AB年度案」といった用語の他にも、小規模校の授業だけで使われる専門用語は多くある。小規模校の教師として、より良い授業をしていくためには、こうした専門用語や独自の仕組みについても理解しておかなければならないと感じた。

小規模校の中でも、特に複式学級の国語授業に焦点を当てて論を進めたが、国語授業は同単元指導を取り入れた方が教育効果の高い単元もあるという考えに至った。学年別指導と同単元指導の二つは複式学級でよく見られる指導方法だが、どちらにもメリットとデメリットがあり、この二つの授業方法を単元によって使い分けることが重要だと考えている。しかし、多くの複式学級校では、科目ごとに授業の行いやすさを重視して授業方法が設定されている傾向があり、一つの科目内で学年別指導と同単元指導が使い分けられている例は少ない。そこで、国語科における学年別指導と同単元指導を組み合わせた年間指導計画を考案したことで、この課題に対する一つの方策を示すことができた。本研究では、国語科の5,6年生を対象を絞ったが、同単元指導や学年別指導に関わらず、小学校のすべての教科、学年で多様な授業方法を取り入れた指導計画が提案されれば、複式学級の

新たな教育的価値を創造することにも繋がると考えている。

第二節 今後の課題

本研究を通しての課題は二点ある。一点目は、実際の小規模校の教育現場を見ることができなかつた点である。本来は、教育実習で小規模校である私の母校に赴き、現場に対する理解を深めるつもりでいたが、新型コロナウイルスの影響で教育実習が中止になってしまったため、電話上でしか話を聞くことができなかった。今後、小規模校で教師をする機会があれば、その時は自身の研究内容と照らし合わせつつ、より良い授業づくりの参考にしていきたいと考えている。二点目は、年間指導計画の提案が国語科の5,6年生のみになってしまったことだ。全ての教科と学年で同単元指導を取り入れた年間指導計画を新たに作成するとすると、膨大な時間と量になってしまうため、今回は対象を絞ることにした。しかし、複式学級の授業をより良くしていく上で、年間指導計画の作成は必要不可欠な要素である。その点も含め、同単元指導を一般的に取り入れていくことの難しさを改めて実感するとともに、この研究が続けられることの必要性を感じた。

最後になりましたが、本研究を進めるにあたり、適切かつ丁寧にご指導をくださった国語教育ゼミナールの守田庸一先生に深謝いたします。並びに、実践の際に快く引き受けてくださり、そして多くの貴重な意見をくださった同ゼミナールの同期・後輩の皆様感謝いたします。協力していただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

<引用・参考文献>

- ・Education Information of Shimane「複式学級指導の手引き(令和元年度改訂版)」
<http://eio-shimane.jp/project/hukushikyoku/319>
 *最終閲覧日 2022年1月7日

- ・愛媛県教育委員会「複式学級学習指導資料」
<https://ehime-c.esnet.ed.jp/gimu/src/02shidou/fukushiki/jissen.html> *最終閲覧日 2021年12月27日
- ・大野恵理・須曾野仁志・萩野真紀・榎本和能(2020)「三重県南部地域の複式学級における圧縮版年間指導計画に基づく外国語指導の実践について」
https://www.hokkyodai.ac.jp/files/00008200/00008231/06_mieken.pdf *最終閲覧日 2021年12月15日
- ・法令文庫「学校教育法施行規則」（昭和二十二年文部省令第十一号）
<https://legaldoc.jp/egov-search/egov-view?cid=1&id=322M40000080011> *最終閲覧日 2022年1月11日
- ・鹿児島県総合教育センター
<http://www.edu.pref.kagoshima.jp/research/result/siryou/top.html> *最終閲覧日 2022年1月5日
- ・総務省（2010）「『平成の合併』についての公表」
https://www.soumu.go.jp/gapei/pdf/100311_1.pdf
*最終閲覧日 2022年1月11日
- ・総務省統計局ホームページ
<https://www.stat.go.jp/data/nihon/02.html>
*最終閲覧日 2022年1月15日
- ・玉井康之(2011)「社会性をはぐくむへき地・小規模校の学級運営の基本的観点と課題」へき地教育研究, pp51-56
- ・深見智一著(2018)『単学級担任・複式学級担任の学級運営』,ふくろう出版, pp58-62
- ・へき地教育研究部「複式学級の授業」
<https://meisei-hekiken.jimdofree.com/>
*最終閲覧日 2021年12月24日
- ・北海道教育委員会(2013)『学校教育の手引き～新しい先生のために』
- ・真木吉雄(2015)「学校統廃合と小規模特任制度に関する一考察」,山形大学大学院教育実践研究科年報, pp4-13

- ・三重県教育委員会「採択地区別教科書状況一覧」
<http://www.pref.mie.lg.jp/index.shtm>
*最終閲覧日 2021年12月27日
- ・三重県教育委員会「学校名簿令和3年度版」
<https://www.pref.mie.lg.jp/common/content/000966597.pdf>
*最終閲覧日 2021年11月18日
- ・光村図書「複式学級における国語科指導」
https://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasho/s_kokugo/fukushiki/index.html *最終閲覧日 2022年1月7日
- ・光村図書「年間指導計画・評価計画資料」
https://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasho/s_kokugo/keikaku/index.html *最終閲覧日 2022年1月7日
- ・文部科学省(2009)「小・中学校の適正配置に関するこれまでの主な意見等」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/038/index.html *最終閲覧日 2022年1月7日
- ・文部科学省(2015)「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引き～少子化に対応した活力ある学校づくりに向けて～」
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2015/07/24/1354768_1.pdf
*最終閲覧日 2022年1月12日
- ・文部科学省(2017)「小中学校及び高等学校の統廃合の現状と課題」
https://www.soumu.go.jp/main_content/000513102.pdf
*最終閲覧日 2022年1月12日
- ・文部科学省(2019)「少子化・人口減少社会に対応した活力ある学校教育推進事業」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tekisei/1420015_00006.htm
*最終閲覧日 2022年1月12日
- ・文部科学省(2021)「小学校における35人学級の実現/約40年ぶりの学級編成の標準の一律引下げ」

https://www.mext.go.jp/b_menu/activity/detail/2021/20210331.html

*最終閲覧日 2022年1月12日

- ・山崎博敏(2014)『学級規模と塩津方法の社会学－実態と教育効果』，東信堂，pp11-29

<教科書>

- ・光村図書『国語 五 銀河』（2019年検定済教科書）
- ・光村図書『国語 六 想像』（2019年検定済教科書）